

例外といかに向き合うか

鈴木彩香 (千葉大学)

1. はじめに

■ 発表の目的

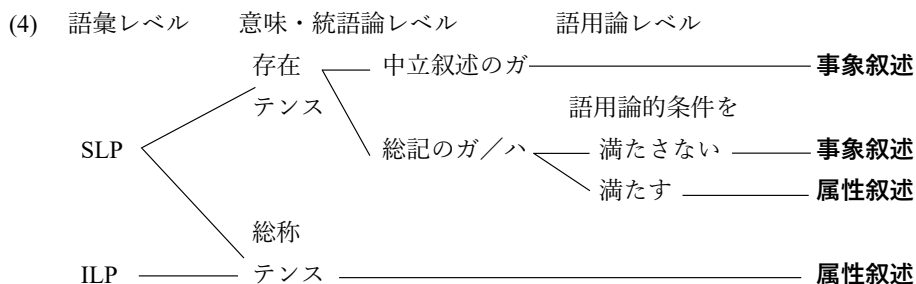
- 分類や仮説の提示を行う上では、例外や反例となる現象に直面することが多い
 - ⇒ 文法記述を行う上での例外的な現象への対処（基本則に対する細則の発見・抽出）については仁田 (1995)が詳しいが、本発表で問題にしたいのは仮説の反例ともなるような「例外」
- 例外のある分類や仮説は、例外に対して何らかの説明を与えるための記述を余分に必要とする点で経済性が低い
 - ⇒ しかし、例外のない規則はないと言われるように、例外への対処は、何らかの基準を立てて分類を行う上で不可避の問題である
- 本発表では、“よい”文法記述を目指す上で、例外となる現象とどのように向き合うべきなのかを検討する

2. 研究事例：属性叙述文の分析

■ 鈴木 (2022)

- 具体的な研究事例として、日本語の属性叙述文の分析を取り上げる
 - (1) a. 太郎が今、りんごを食べている。 [事象叙述]
b. 太郎は東京出身だ。 [属性叙述]
 - (2) a. 事象叙述：現実世界のある時空間に実現・存在する事象（出来事や静的事態）を叙述するもの
b. 属性叙述：現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べるもの (益岡 1987: 21)
- 問い：叙述の型は何によって決まるのか？
 - ⇒ 述語の品詞（動詞／名詞）や主語名詞句をマークする助詞（ガ／ハ）が叙述の類型と一対一に対応しているわけではない (cf. (1))
- (3) a. 太郎は今、りんごを食べている。 [事象叙述]
b. 太郎は 100 メートルを 11 秒で走る。 [属性叙述]
- 主張：叙述の型を決定する要因は、テンスの総称性(genericity)の観点を中心とすると、語彙レベル (stage-level predicate/individual-level predicate; Carlson 1977、以下 SLP/ILP)、意味・統語論レベル、語用論レベルの要因に整理することができる
 - ⇒ (1a)や(2a)は特定の時間軸と結びつけられた存在的な(existential)テンス、 (1b)や(2b)は特定の時間軸に結びつけられない総称的な(generic)テンスを持つ

⇒ 日本語における叙述の型の決定プロセスは(4)のように示すことができる



■ (4)の体系の利点

➤ ① 形式を重視した体系の整理ができる

⇒ (3b)のような動詞を用いた属性叙述文におけるル/テイルのアスペクト対立は、テンスの総称性の対立として位置づけることができる

(5) a. 太郎は毎朝公園を走る。 [総称テンス]

b. 太郎は毎朝公園を走っている。 [存在テンス]

(6) a. *太郎は一昨年から毎朝、公園を走る。

b. 太郎は一昨年から毎朝、公園を走っている。

⇒ 述語の品詞や主語の助詞がどのように関係しているのかも位置づけることができる（動詞は基本的に SLP で名詞は基本的に ILP、統語構造の違いに応じて主語の助詞が選択されるなど）

➤ ② 属性叙述文内部の違いが見えやすくなる

⇒ 益岡 (2021)で指摘されている「本来的な属性」と「事象から派生する属性」の違いを明確にすることができる

⇒ 存在テンスを持つ属性叙述文は、一定の語用論的要因存在テンスを持つ点では事象叙述文と共通性があるが、一定の語用論的要因を満たすことによって属性叙述文となる

⇒ (7)は(8a)の応答としては事象叙述文であるが、(8b)の応答としては属性叙述文となる

(7) 太郎は昨日、地元のマラソン大会で優勝したよ。

(8) a. 太郎は昨日、何をしたの？

b. 太郎ってどんな人？

⇒ (1b)と(7)は、意味・統語論レベルで形成される属性叙述と語用論レベルで形成される属性叙述という点で異なること、「事象から派生する属性」の中でもテンスの総称性による違いがあることなどが明確に示せる

➤ ③ 他言語の現象とのつながりが見えやすくなる

⇒ 事象叙述／属性叙述の対立は、英語などの言語を対象とした総称文研究（Carlson 1977, Diesing 1992, Kratzer 1995, Krifka et al. 1995 他）との関わりが指摘されている（眞野 2008）ものの、概念が共通していない分つながりが見えにくかったが、各レベルの要因を整理することにより共通点が見えてきた

■ (4)の体系の例外

➤ (4)の体系は、ILPは事象叙述文を形成しないことを予測するが、井川 (2012)、眞野 (2023)などにも指摘があるように、一定の環境ではILPが事象叙述文を形成することができる

(9) (いつもと違って) 今日健は正直だ。 (眞野 2023: 108)

(10) あっ、月が丸い。

⇒ (9)(10)で用いられている述語は、(11)に見るように通常は属性叙述文を形成するが、通常時との比較や驚きを持ってその属性を知覚する際には、事象叙述文を形成する

(11) a. 健 {は／*が^{中立叙述}／が^{総記}} 正直だ。

b. 今日の月 {は／*が^{中立叙述}／が^{総記}} 丸い。

3. 例外といかに向き合うか

■ 経済性と明瞭性の相克

➤ (4)の体系を維持したまま(9)(10)のような例外にも説明を与えようとすると、記述の経済性が損なわれてしまう

⇒ 仁田 (1995)も論じているように、例外的現象への対処としては(12)のような仮説改訂の可能性があり、こうした改訂は直ちに経済性を損なうとは言えない

(12) a. 例外的現象をも包括できるように、規則の説明能力のさらなる拡大を図る

b. 合理的な細則的説明や付加的条件によって、例外的現象に対する適切な位置付けを与える (仁田 1995: 42)

⇒ しかし、(9)(10)のような例が存在するということは、語用論的要因が語彙レベルの概念にも影響していることを意味しているため、場合によっては(4)のような語彙レベル→統語・意味レベル→語用論レベルという積み上げ式の文法観から見直さなければならない可能性もある¹

⇒ つまり、例外現象への対処としては、(12)だけでなく仮説そのものを大きく作り

¹ 総称文研究においても、SLP/ILPといった語彙分類ではなく語用論的要因を重視して分析する必要性が主張されている（Glasbey 2006, Magri 2010, Mizutani 2017 他）。

直す必要が生じることもあるということである²

- 一方で、(4)の体系が重視しているのは、属性叙述文が属性叙述文たり得る条件とはどのようなものかを、できるだけ明瞭な形で示すということである
 - ⇒ 語用論的要因の扱いが不十分であるが、形式的な対立に重きを置き、明瞭性に志向したアプローチといえる
 - ⇒ (2)のような属性叙述文の定義は(9)(10)のような現象を例外としない³が、言語直観に頼った抽象的な定義の仕方とも言える
 - ⇒ (2)の定義は前提として尊重した上で、さらにその内実を分解していく試みが必要
- このような経済性と明瞭性の相克関係は、個別の事例に限らず一般的に存在するものと考えられ、文法記述を行う上では両者のバランスをとっていく必要がある
- ここではもう一步踏み込んで、“よい”文法記述を行っていくためには、明瞭性の方をより多くとってよいのではないかと主張したい
 - ⇒ ここでの“よい”文法記述とは、研究コミュニティ間で研究成果を積み上げていきやすい文法記述ということを意味しており、研究の蓄積・共有のためには、明瞭性の高い分析を提示し、どこまでが明らかになり、どこからが分かっていないのかを示すことが重要である⁴
 - ⇒ 自戒を込めた教訓として、経済性よりも明瞭性を重視した場合、例外の存在に言及することが必要である（鈴木（2022）ではできていなかった）

■ “よい”例外、“悪い”例外

- ただし、例外を認めることが「単なる開き直り」にならないよう、どのような例外が研究の蓄積に志向した“よい”例外なのか、ということを考える必要がある
 - ⇒ “よい”例外とは、過渡期的な研究段階において、その現象を外して考えることによって対立が明確になったり、全体の体系性を考えやすくするものである
 - ⇒ 研究の次の段階で、例外を含めた説明を可能にするためには現状の仮説をどのように修正すればよいか、ということを考えていくことによって、研究が進展する

² 仮説検証法に関しては、窪田（2019）が詳しく論じている。窪田（2019）では、仮説検証の手法に従った研究を理論的研究と呼び、記述的研究と区別しているが、仮説検証を繰り返すことによってよりよい仮説に近づけていくというプロセスをとるという点では、本発表では記述的研究にも共通する部分があると考えている。

³ 益岡（1987, 2008）では、事象叙述と属性叙述の対立を連続的なものとしてとらえる見方が示されており、(9)(10)のような例は「非内在的属性叙述」あるいは「中間型」として位置づけられるものと考えられる。

⁴ 山泉（2019）では、理論を支持する研究結果だけでなく、支持しない研究結果も同様に評価されるべきであることが論じられている。山泉（2019）は理論的研究にまつわるバイアスを様々な角度から論じたものであり、その趣旨と本発表の提言は異なるものの、研究コミュニティ全体で研究が前進することを目指すという理念は共通しているものと考えられる。

- そのための前提条件として、やはり偶発的、散発的な例外は“よい”例外になりにくい
 - ⇒ 一定の条件下で認められるといった、ある程度の傾向性を持った例外であれば、今は説明が与えられない例外だとしても、研究の進展とともに説明が与えられる可能性がある

4. まとめ

- 例外は記述の経済性を下げるものであるが、その現象を外して考えることによって対立が明確になる現象や、全体の体系性が考えやすくなることもある
- 研究コミュニティ全体で研究が進むことを志向した記述が“よい”文法記述の1つの形だとすれば、例外の存在する分析の“よさ”は、明瞭性をどれだけ示せるかによって測られるのではないか

参考文献

- 井川壽子 (2012) 『イベント意味論と日英語の構文』 くろしお出版。／鈴木彩香 (2022) 『属性叙述と総称性』 花鳥社。／窪田悠介 (2019) 「理論的研究とは？」『基礎日本語学』 pp.260-282, ひつじ書房。／仁田義雄 (1995) 「文法における規則性と例外的現象」『日本語学』 14, pp.42-51, 明治書院。／益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』 くろしお出版。／益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」 益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 pp.3-18, くろしお出版。／益岡隆志 (2021) 『日本語文論要綱—叙述の類型の観点から—』 くろしお出版。／眞野美穂 (2008) 「叙述類型研究史 (海外編)」 益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 pp.193-220, くろしお出版。／眞野美穂 (2023) 「書評 鈴木彩香著『属性叙述と総称性』」『日本語の研究』 第19巻1号, 日本語学会, pp.102-109。／山泉実 (2019) 「言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス」『日本語・日本文化研究』 29, pp.44-72, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻。／Carlson, Gregory N. (1977) *Reference to Kinds in English*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst。／Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press。／Glasbey, Sheila (2006) Bare plurals in object position: Which verbs fail to give existential readings, and why? In Svetlana Vogeleer and Liliane Tasmowski (eds.) *Non-Definiteness and Plurality*, pp.133-160, Amsterdam: Benjamins。／Kratzer, Angelika (1995) Stage and individual level predicates. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.125-175, Chicago: University of Chicago Press。／Krifka, Manfred, Francis Jeffrey Pelletier, Gregory N. Carlson, Alice ter Meulen, Gennaro Chierchia, and Godehard Link (1995) Genericity: An introduction. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.1-124, Chicago: University of Chicago Press。／Magri, Giorgio (2010) *A Theory of Individual-level Predicates Based on Blind Mandatory Scalar Implicatures*. Ph.D. dissertation, MIT。／Mizutani, Kenta (2017) Decomposing individual-level gradable adjectives, *Proceedings of the 41st meeting of Kansai Linguistic Society*, pp.205-216.

謝辞

本発表の内容は、JSPS 科研費 21HP5049 の研究成果の一部である。